

論』、稲葉良仙『三焦營衛論』などの理論的医書も見られ、出版点数も増大している。このことから一八世紀中葉に、活発で多方向な医学の日本的展開が起こっていることを読み取ることも可能であろう。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所、医史文献研究室)

## 『保嬰三方』について

広 田 曄 子

『保嬰三方』の著者は波多野三柳で、父祖の代より山陽の浜で医業を営む家系の出身であった。三柳は自序の中で、自分は古方を擁護し、古方を基準として治療に当たったと述べている。したがって古方派に属するといえよう。『保嬰三方』が著されたのは吉益東洞の活躍する以前で、香月牛山の活躍した時代と一致する。『保嬰三方』について、その歴史的位置づけをするために若干の考察を試みた。

まず、その内容であるが、はじめに引用書目を記している。江戸時代の小児科専門書の中では下津寿泉の『古今幼科摘要』(二六二九年)にもはじめに引用文献の記載がある。『保嬰三方』には七三の引用書を挙げているが、いずれも中国の書物である。本文中にも日本の医書の引用はない。これは江戸時代後期に著された小児科関係の記載と比べると大きな違いである。つきに、記載の順序であるが、『保

『嬰三方』では驚風、疳症、脾胃虚羸、傷食、虫門、嘔吐、泄瀉、諸熱、感冒といった小兒科領域で最も多い重要な疾病をはじめに記載しており、巻中においてはじめて初誕、胎肥、臍風、変蒸、客忤などを載せている。また、一つの門に三つの処方しか記していないことも、極めて実践的なことと思われる。

本文には疾病についての説明はなく、ただ処方のみ挙げている。したがって変蒸とか客忤といった古い概念に対しても新しい解釈はないが、初誕のところで「柳按ずるに」として中国の医書を引用しながらも自身が疑問に感じたことを素直に述べている。

つぎに、処方内容を見ると、『傷寒論』の処方はずか六つであるが、現代小兒科でもよく用いられる小柴胡湯や五苓散はこれらに含まれている。

構成生薬については、麻黄は敗毒散加減に用いられているのみであるが、地黄や大黄の入った処方はかなり用いられている。これより七〇年程前の曲直瀬道三の著した『遐齡小兒方』には地黄の入った処方はかなりみられるものの、大黄の入った処方は数個にすぎず、麻黄の入った処方

はみられない。前述の『古今幼科摘要』にも麻黄や大黄の入った処方は極めて少なく、地黄の入った処方はかなりみられる。三柳が奇病をよくなおしたといわれるわけは、それまでの温補剤中心の方剤でなく、大黄などを含んだ攻撃的方剤を運用したことによるのかもしれない。江戸時代後期の小兒科関係の医書では一般に大黄はよく用いられているので、三柳の時代から大黄が使われはじめた可能性もある。吉益東洞のような攻撃的方剤を使用する医師が出る基盤となったといえないだろうか。

つぎに処方構成であるが、『保嬰三方』に記載された処方数は三一であり、江戸時代後期に著された小兒科専門書である『保嬰須知』の一九三処方と比較するとかなり少ない。また、構成生薬の数も八から一一の処方が、『保嬰三方』には江戸時代後期の諸書よりも多い傾向にある。

引用文献については、すべてが中国のものであり、とくに明の時代のものの引用が多い。自ら、古方に基づいた治療を行ったと述べているわりには宋以前の医書や著者の引用は少ない。『医事小言』や『内科秘録』といった江戸時代後期の古方派の医師が著した医書におけるほうが、宋以

前の医書や著者名の引用回数率は高い。

以上のように、『保嬰三方』には記載の順序にもそれまでの医書にみられない新しさがあり、処方数も各門に三つと定めるなど実践的な面が多い。自ら古方派と称するにしては古い医書の引用は少なく、『傷寒論』の処方の引用も少ないが、その処方内容はそれまでになく大黄の入った処方を多く記載しており、東洞の出現を予想せしめるものがある。吉益東洞は日本独特の医学をつくり上げたことで評価すべきであるが、その独創性の芽生えはこの時代にもみられたのではないだろうか。

(擘小兒科内科)

## 黄会友の「神仙秘法」について

——高嶺徳明、伊佐敷道与の

秘術に関連して——

松 木 明 知

1

演者はこれまで高嶺徳明によって琉球に伝えられ、さらに島津藩医伊佐敷道与によって鹿児島に伝播された、福州の黄会友の秘伝の医術について、主として麻醉科学の立場から研究を行ってきた。

これは徳明の伝えた秘伝の一部は全身麻酔であろうという推定に基づいており、高嶺家に伝えられた口伝「痛くないようにして手術を行った」とされているからである。

しかし手懸りとなる史料が殆ど失われていたため、この本態に関しては知られるところがなかった。

朝日新聞全国版に報じられた演者の記事が機縁となつて、鹿児島県川内市の川内市歴史資料館において、右の黄